

「(仮称)第 5 次町田市農業振興計画」の策定について(資料編)

1. 農家アンケート

(1)調査名

次期農業振興計画策定に向けた市内農業に関する調査(市内農業者)

(2)調査の目的

本調査は、市内農業の現状を把握し、次期農業振興計画検討の参考とすることを目的とする。

(3)調査対象者

- 市内で 1,000 m²以上の農地を所有する農家
- 町田市認定農業者
- 町田市認定新規就農者

(4)調査方法

郵送及びメールにてアンケート調査票を配布、郵送による返送またはWEBでの回答

(5)調査期間

2025 年 9 月 30 日から 2025 年 11 月 26 日まで

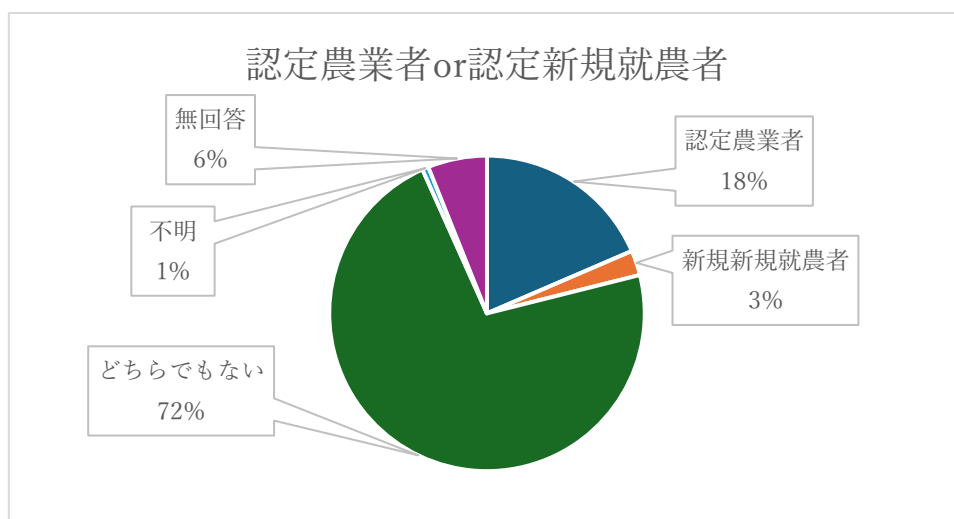
(6)回答数と回答率

対象者数	回答数	回答率
883 人	313 人	35.4%

(7)調査結果

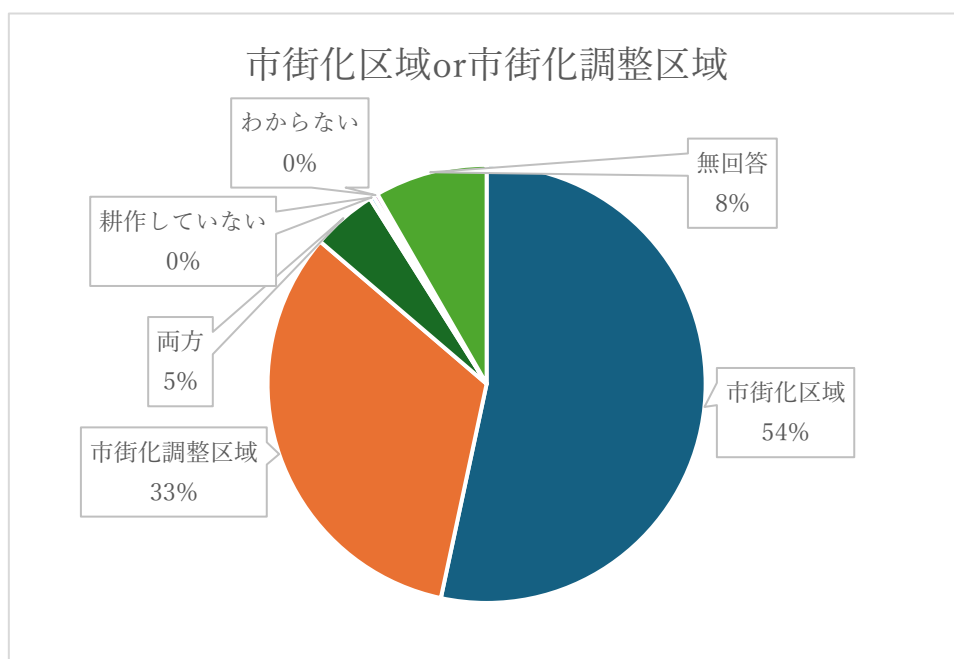
<認定農業者・認定新規就農者>

回答者のうち、「認定農業者」が 18%、「認定新規就農者」が 3%で、「どちらでもない」が 72%と最も多くなっています。



<農地の種別>

主に「市街化区域」を耕作している方が 54%、「市街化調整区域」を耕作している方が 33%でした。

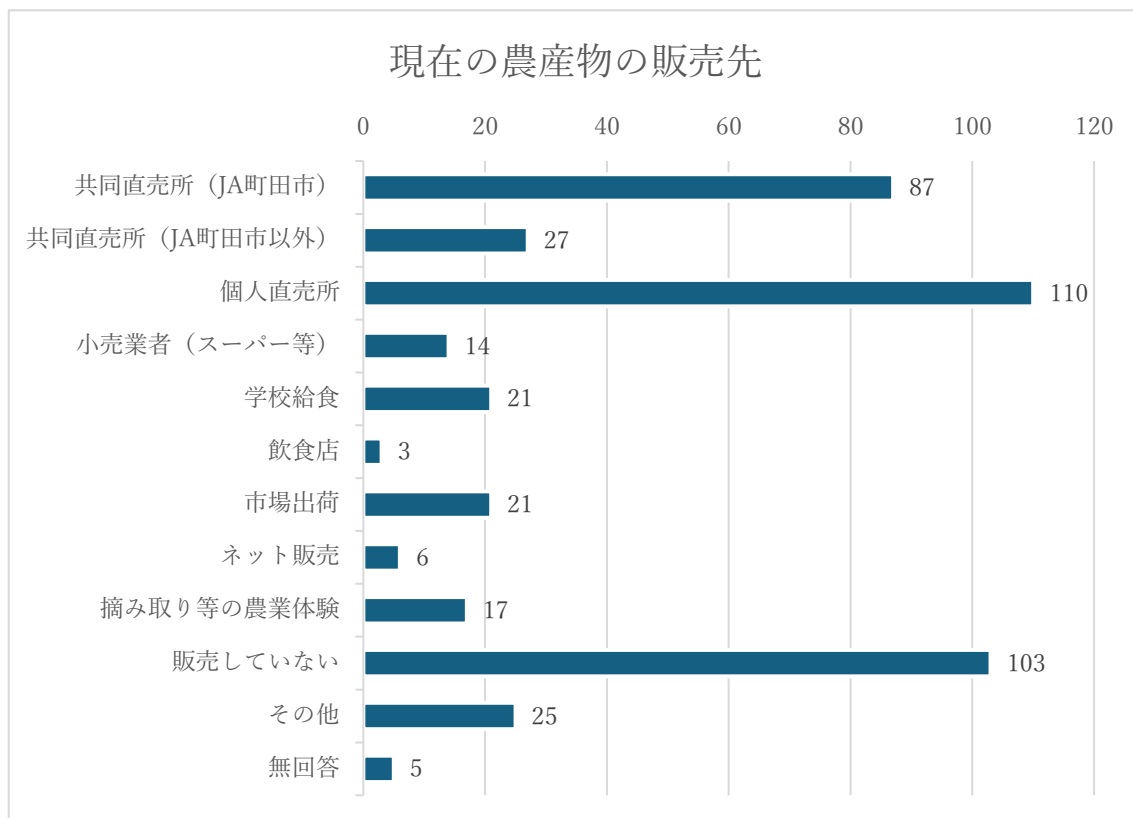


<現在の農産物の販売先(3 つまで選択)>

「個人直売所」が最も多く、次いで「販売していない」、「共同直売所(JA 町田市)」でした。

「飲食店」は全体の 1%で、農家から直接飲食店へ納品しているケースは少ないことがわかりました。「その他」の回答では、「友人・知人・近所」が多数を占めているほか、「薬師池公園四季彩の杜西園直売所」「小野路宿里山交流館」「日曜朝市」といった回答がありました。

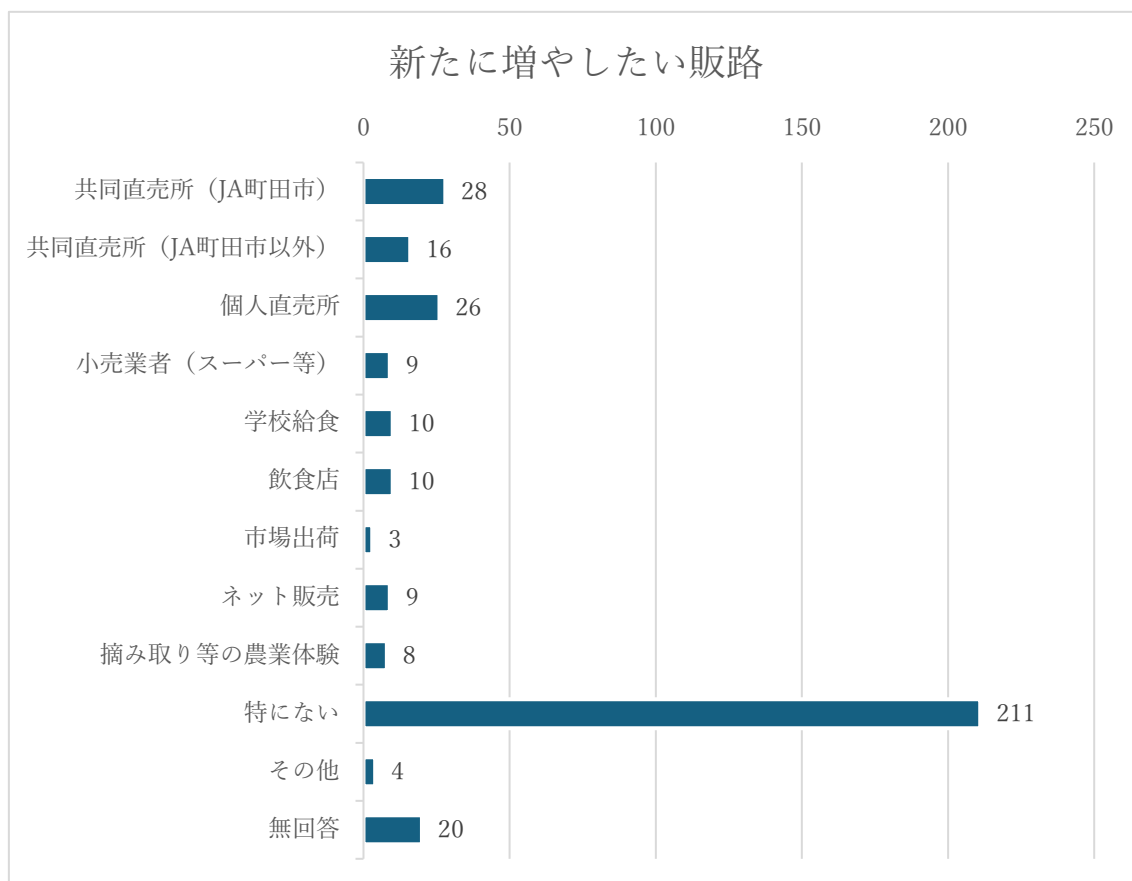
なお、認定農業者及び認定新規就農者に限ると、「共同直売所(JA 町田市)」へ出荷している方が最多でした。また、「学校給食」に出荷している人が全体の割合の 2 倍になっています。



<今後増やしたい販路(3 つまで選択)>

「特にない」で最も多く、次いで「共同直売所(JA町田市)」、「個人直売所」でした。「その他」の回答では、「自家消費」「イベント出店」「小野路宿里山交流館」といった回答がありました。

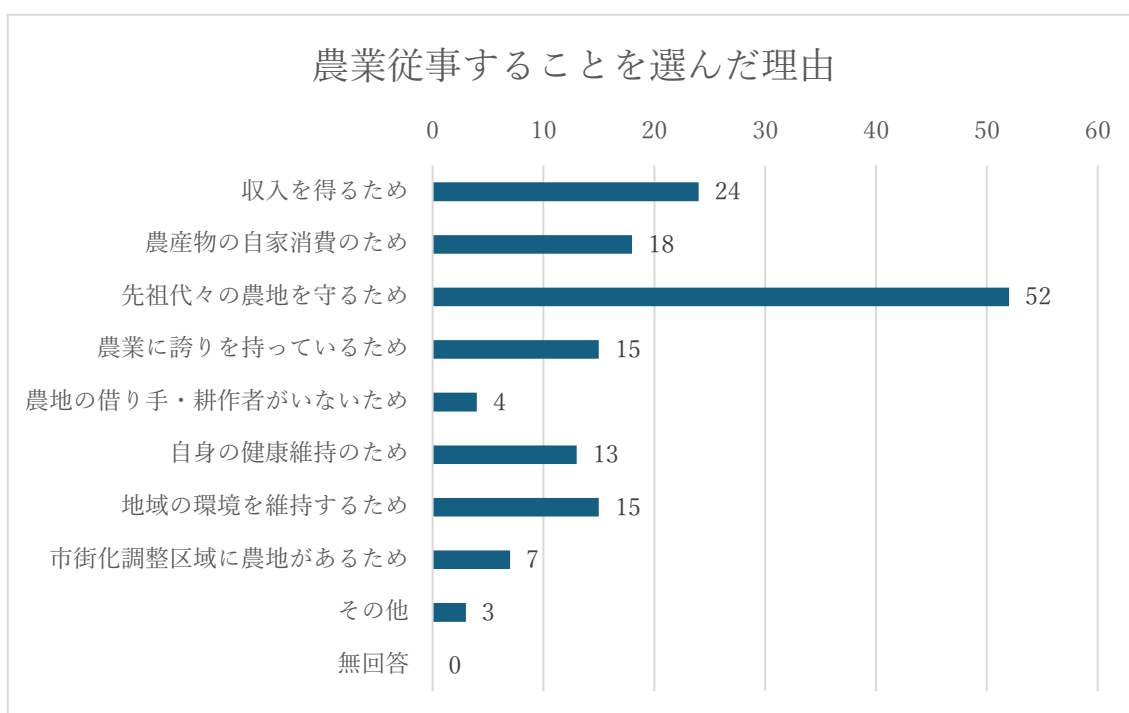
現状で満足しており、今後の販路拡大意欲は多くないことがわかりました。



<農業従事することを選んだ理由>

「先祖代々の農地を守るため」が最も多く、次いで「農産物の自家消費のため」、「収入を得るため」でした。「その他」の回答では、「生産緑地のため」「相続税が支払えないため」「納税猶予を受けているため」と農地の状況に関する回答があったほか、「生産出荷にお金と喜びを得られるため」「新鮮な野菜のおいしさを伝えたいため」「地域との関わりを大切にしているため」というポジティブな回答もありました。

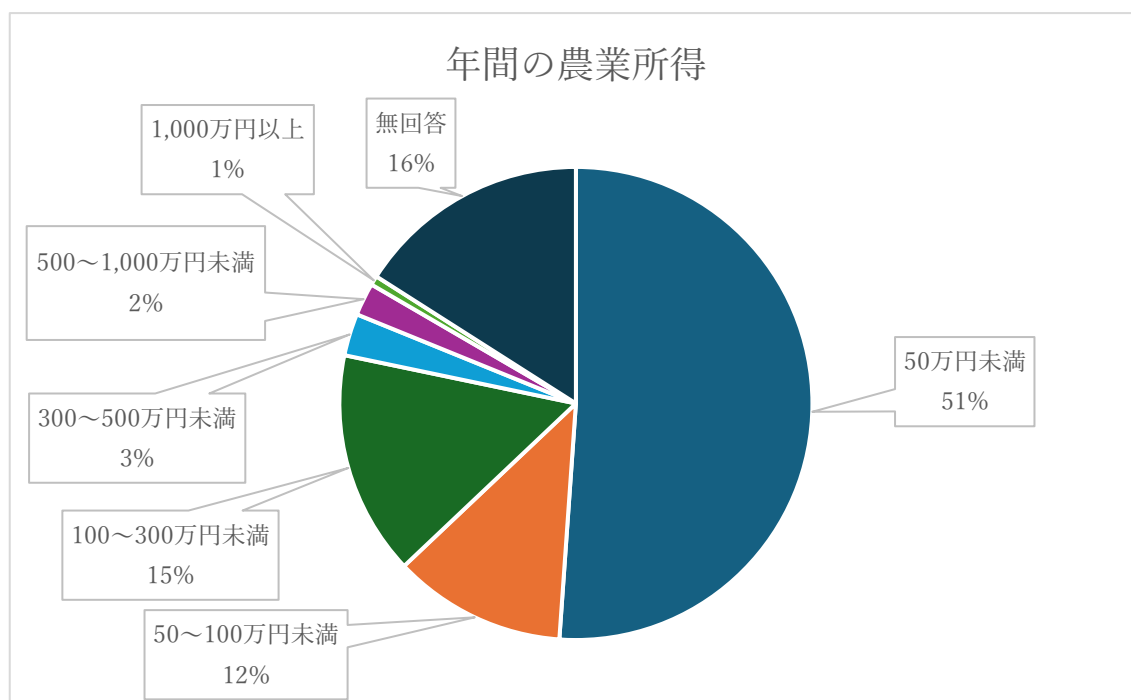
なお、認定農業者及び認定新規就農者に限ると、「農業に誇りを持っているため」と回答した人の割合が農業者全体の回答の2倍になっています。



<年間の農業所得>

「50 万円未満」(51%)が最も多く、次いで「100～300 万円」(15%)、
「50～100 万円未満」(12%)でした。

「50 万円未満」という回答が半数以上を占めていることから、農業収入を主
収入としていない農業者が多いことがうかがえます。

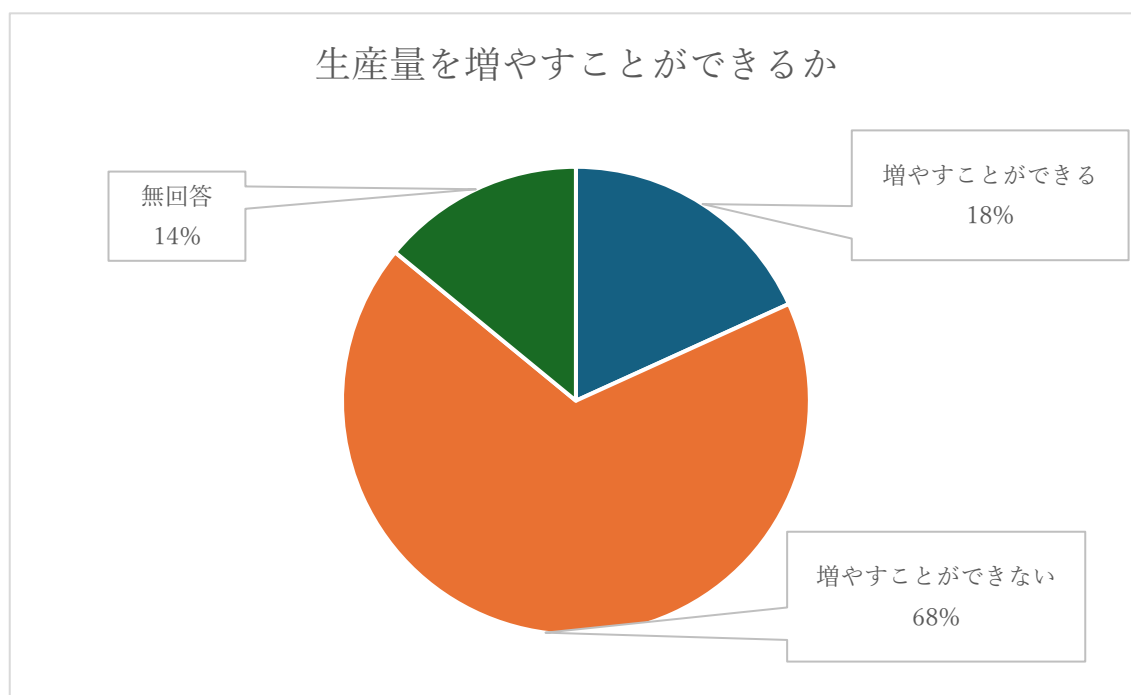


<生産量増加の可否>

「今後、市民の購入量や飲食店での使用量の増加により市内産農産物の需要が増えた場合、生産量を増やすことができますか？」の問いに対して、「増やすことができる」と回答した人は 18%、「増やすことができない」と回答した人は 68%でした。

「増やすことができない」理由としては、「高齢のため」「体力・体調的に厳しい」と答えた人が圧倒的に多く、次いで「後継者がいない」「人手不足」でした。「耕作する農地が無い」「農地の条件が悪い」「現状で手一杯」「作業量や時間に余裕がない」と答えた人も一定数いました。

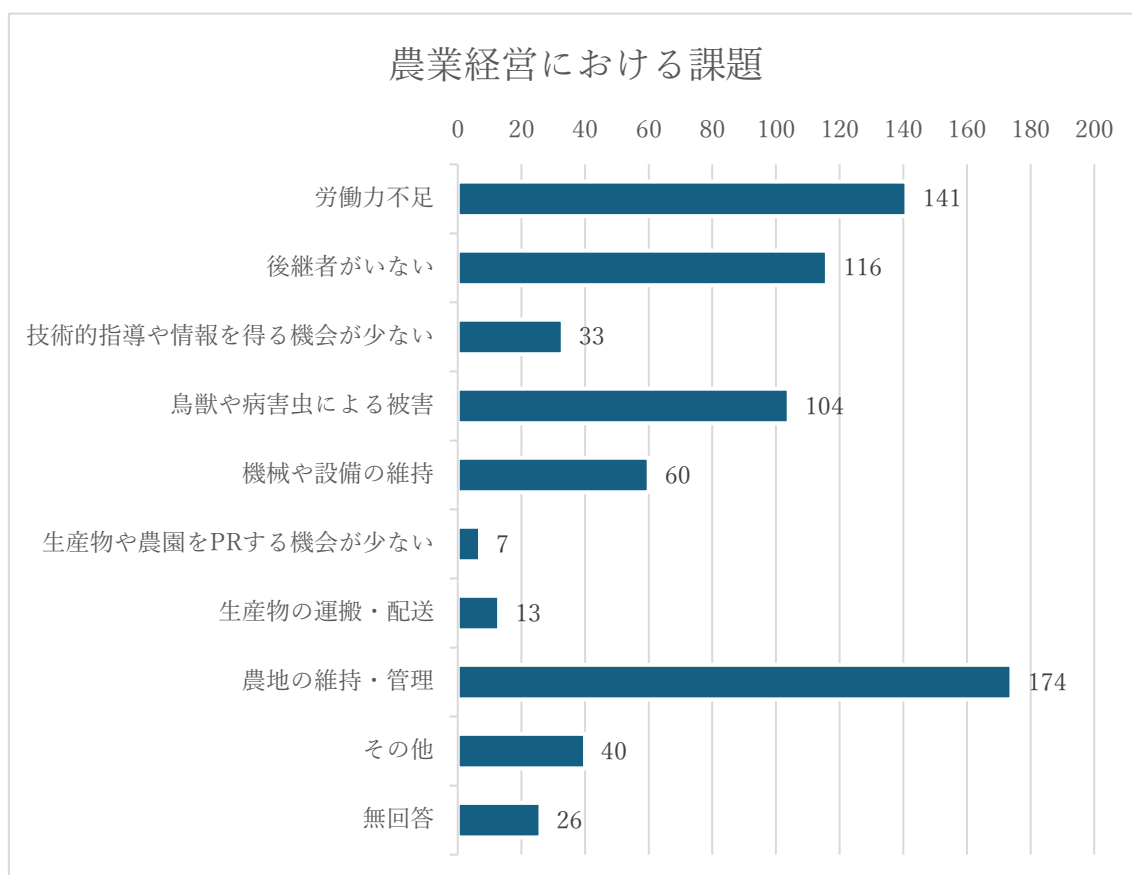
なお、認定農業者及び認定新規就農者に限ると、「増やすことができる」と回答した人の割合が農業者全体の回答よりもかなり多くなっています。



<農業経営における課題(3 つまで選択)>

「農地の維持・管理」が最も多く、次いで「労働力不足」、「後継者がいない」でした。「その他」の回答としては、「暑さなど異常気象への対応」という回答が複数あったほか、「販売価格が安すぎる事」「所得が低すぎる事」などの収入に関する事、「近隣住宅への配慮」「農地貸借の推進」などの課題が寄せられました。

なお、認定農業者及び認定新規就農者に限ると、全体の傾向は変わりありませんが、「労働力不足」の割合が農業者全体の回答よりも多くなりました。



2. 町田市農業委員・農地利用最適化推進委員アンケート

(1) 調査名

次期農業振興計画策定に向けた市内農業に関する調査(農業委員会)

(2) 調査の目的

本調査は、市内農業の現状を把握し、次期農業振興計画検討の参考とすることを目的とする。

(3) 調査対象者

- 町田市農業委員
- 町田市農地利用最適化推進委員

(4) 調査方法

2025 年 10 月の農業委員会総会時にアンケート調査票を配布、翌月回収

(5) 調査期間

2025 年 10 月 24 日から 2025 年 11 月 25 日まで

(6) 回答数と回答率

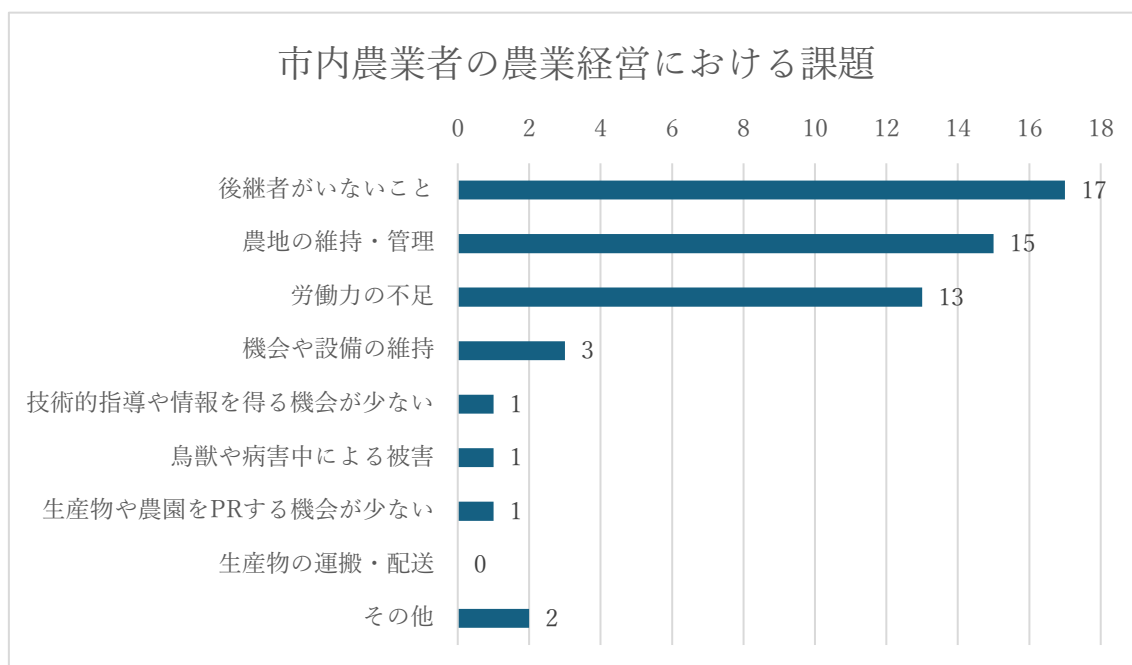
対象者数	回答数	回答率
20 人	18 人	90%

(7)調査結果

<市内農業者の農業経営における課題(3 つまで選択)>

「後継者がいないこと」が最も多く、次いで「農地の維持・管理」、「労働力不足」でした。8 ページにおいて市内農業者への同様の質問をしていますが、上位 3 つの回答項目は共通しており、農業者自身だけでなく農業委員・農地利用推進委員から見ても、「後継者がいないこと」「労働力の不足」「農地の維持・管理」が大きな課題だと感じていることがわかりました。

また、「その他」の回答としては、「宅地よりも農地の方が売りがやすく相続のたびに減少すること」という課題が寄せられました。



<市内農地を適正に維持・保全するために必要だと思うこと(自由記述)>

- 遊休農地や耕作放棄地について、農地パトロールを実施して指導を行いつつ、高齢化や後継者不足により耕作が難しい場合は地域の若手農業者などに貸借することで、農地を有効活用できるのではないかという意見が多くありました。ただ、貸借に対してはまだ抵抗がある農業者もいるため、貸借制度への理解促進が必要です。
- 後継者の育成やボランティアの活用など、担い手の育成が必要だという意見も多くありました。
- また、相続時の税負担が大きいことから、税制改正や税制優遇を求める意見もありました。

<市内で農業の担い手を増やすために必要だと思うこと(自由記述)>

- 農業で安定した生計が立てられる収入を得られることが必要だという意見が多くありました。補助金の活用や農産物のブランド化による農家の所得水準向上を望む意見も寄せられました。
- 市民と農業者との交流や、気軽に農業体験・農業従事ができるような仕組みを構築することで、市民の農業への理解促進や担い手の人材発掘が必要だという意見が多くありました。
- 後継者や就農前の農業者に対して、農業への理解促進や農業の楽しさを伝えるような勉強会などを開催しては、という意見がありました。また、担い手不足の背景には新規参入の難しさがあるため、新たな担い手が参入しやすい環境づくりが必要との意見も寄せられました。
- 高齢化や担い手不足が進んでいく中で、作業を機械化し、農業に係るマンパワーを省力化していく必要があるとの意見もありました。

<市民にもっと農業に親しんでもらうために必要だと思うこと(自由記述)>

- 親子でできる農業体験(収穫体験・野菜作り体験・農家との交流)や、農産物を活用したイベントを増やすべきという意見が多くありました。特に、子どもに関連したご意見が多く、学校と連携した農業体験が有効とのご意見もいくつか寄せられました。
- 市民の農業への理解促進のために、SNS などを活用して町田産農産物を PR していくべきとの意見がありました。
- JA町田市と連携しながら、新たな販路の拡大など、町田産農産物がいろんな場所で販売されているような環境を整備していくべきとの意見がありました。
- 市民が自ら耕作して収穫する体験をしてもらえるような市民農園を増やしていくことも有効では、という意見がありました。

<町田産農産物の消費量と生産量を増やし、市内農業を振興していくために必要だと思うこと(自由記述)>

- 消費量を増やすためには、引き続き町田産農産物の PRが必要だという意見が多くありました。
- JA 町田市が運営する「アグリハウス」以外の販路拡大や JA 町田市の店休日を活用した直売会の実施など販売の機会を増やすこと、料理コンテストなどの町田産農産物を活用したイベントを実施すること、農産物のブランド化の取組を実施することなどの意見がありました。
- 生産量を増やすために、援農ボランティアの増員など農業人材の確保が必要との意見がありました。
- 農産物に付加価値をつけるための加工販売や、農業用機械に関する補助金活用のために、認定農業者などの農業者同士が連携して農業法人化することも有効では、との意見がありました。

3. 市民アンケート(町田ちょこっとアンケート)

(1)調査名

「町田産農産物や町田の農業」に関する町田ちょこっとアンケート

(2)調査の目的

本調査は、次期農業振興計画検討の参考とするために、町田産農産物の認知度や購入頻度等についてお伺いすることを目的とする。

(3)調査対象者

町田市メール配信システムの「町田ちょこっとアンケート」のカテゴリに登録している方

(4)調査方法

町田市メール配信システムによるWEBでの回答

(5)調査期間

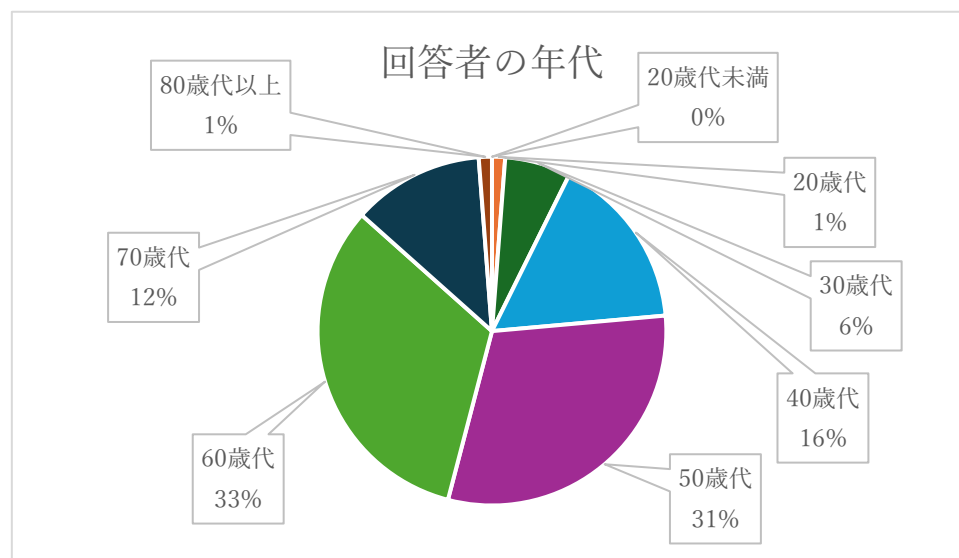
2025 年 12 月 12 日から 2025 年 12 月 16 日まで

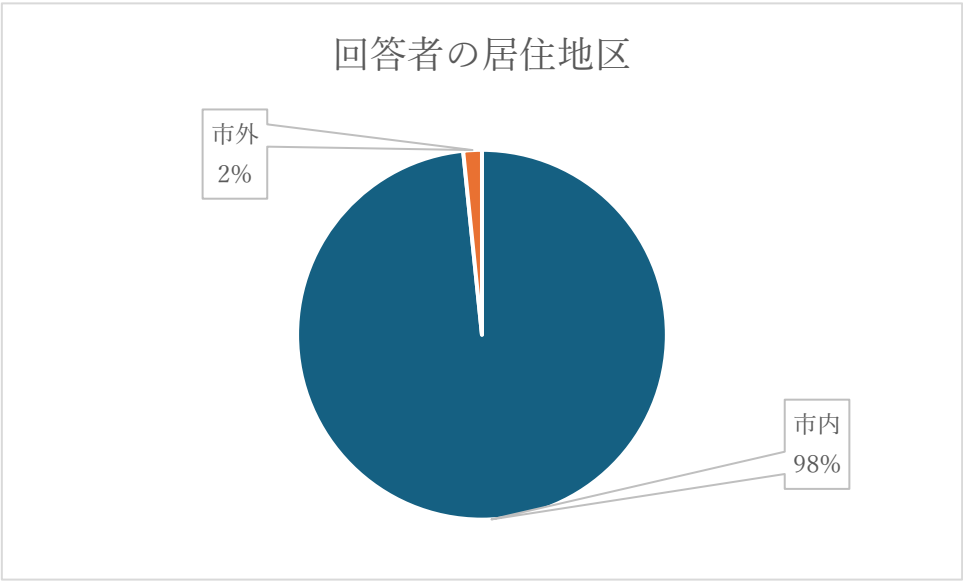
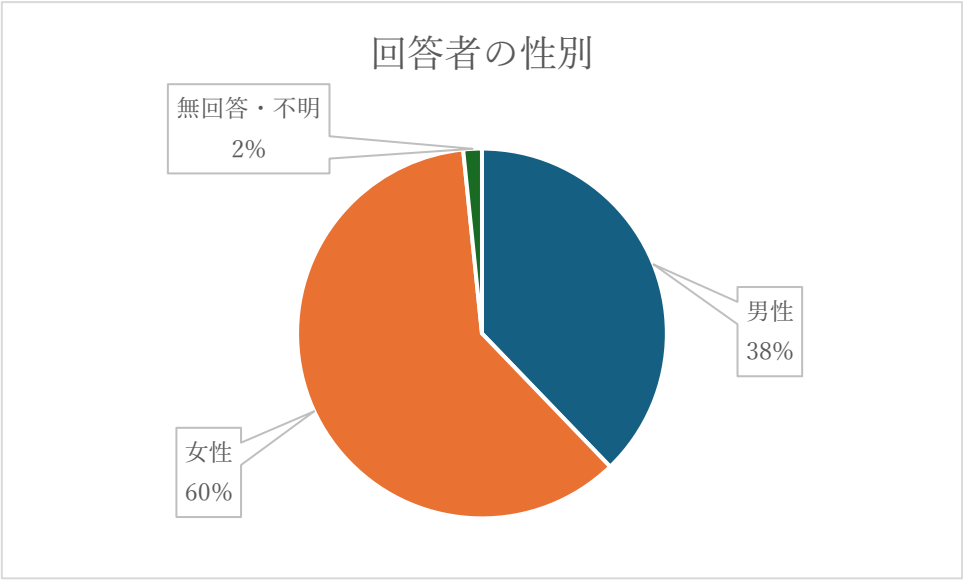
(6)回答数と回答率

対象者数	回答数	回答率
2,726 人	246 人	9.0%

(7)調査結果

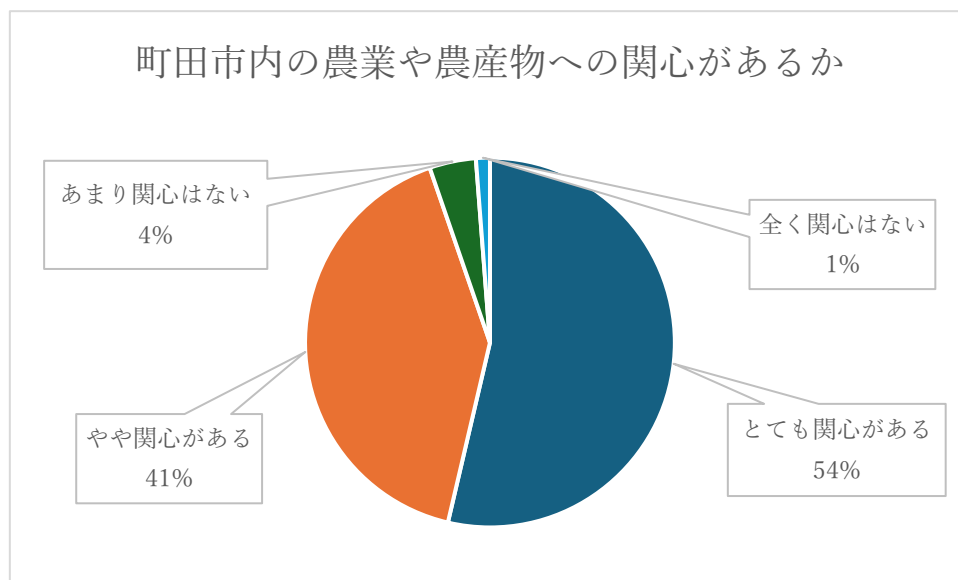
<回答者の属性>





<町田市内の農業や農産物への関心があるか>

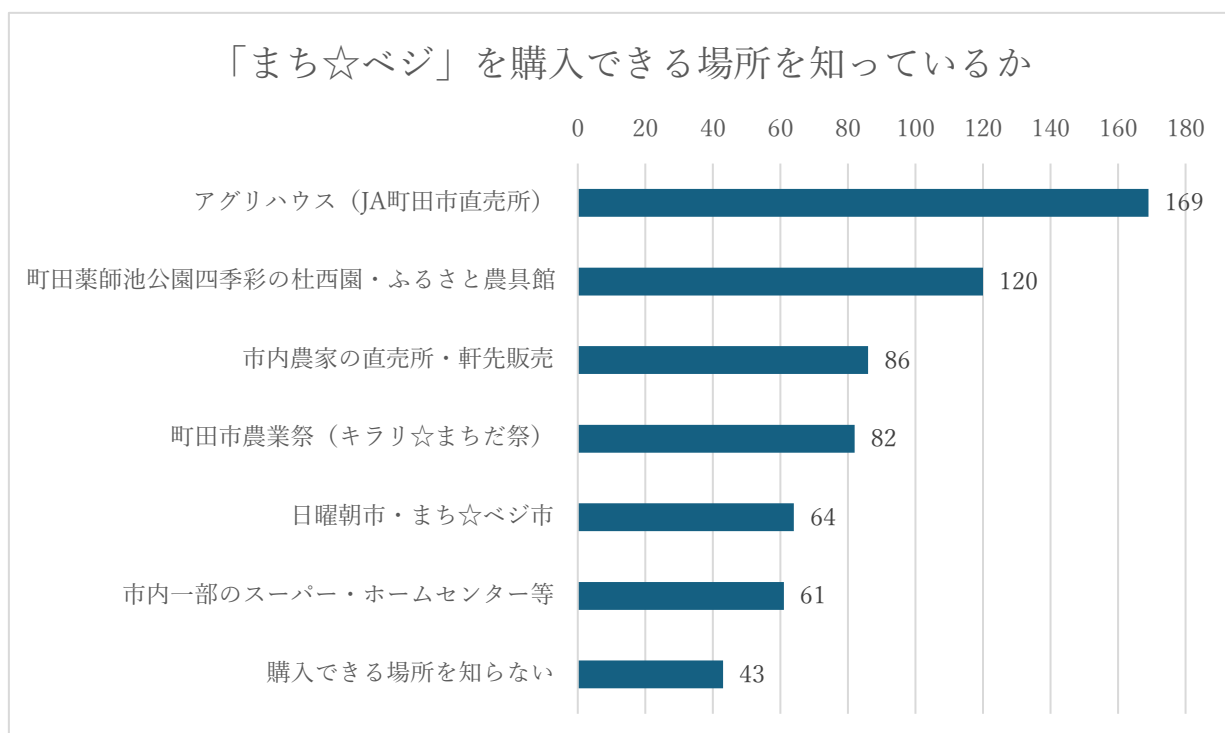
「とても関心がある」「やや関心がある」の回答を合わせると 95%となり、町田市内の農業や農産物に関心がある方が多いことがわかりました。



<町田市内の農業や農産物への関心があるか(複数回答)>

「アグリハウス(JA 町田市直売所)」(68.7%)で最も多く、次いで「町田薬師池公園四季彩の杜西園、ふるさと農具館」(48.8%)、「市内農家の直売所・軒先販売」(35.0%)でした。

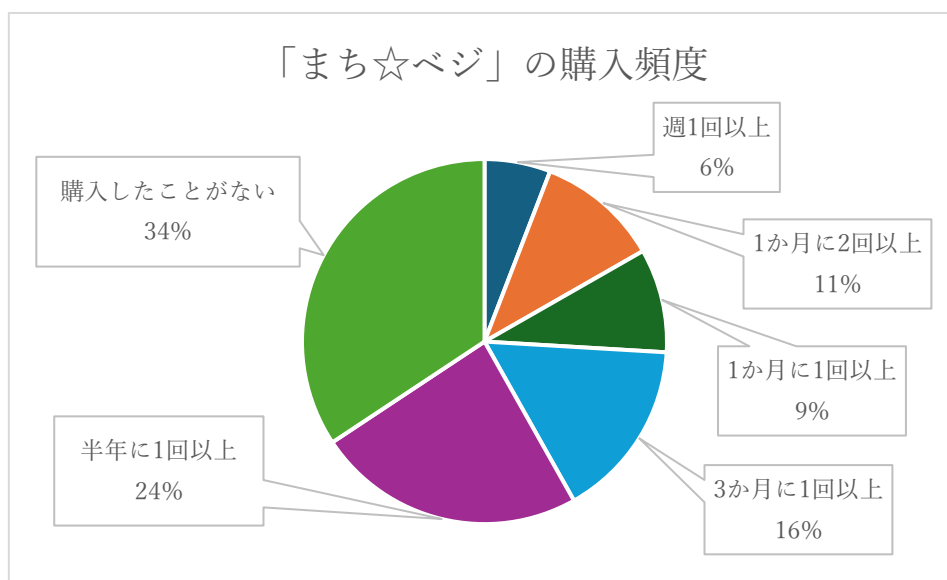
一方、「購入できる場所を知らない」(17.5%)という回答もあり、まだまだまち☆ベジの販売場所が周知されていないことがわかりました。



<「まち☆ベジ」の購入頻度>

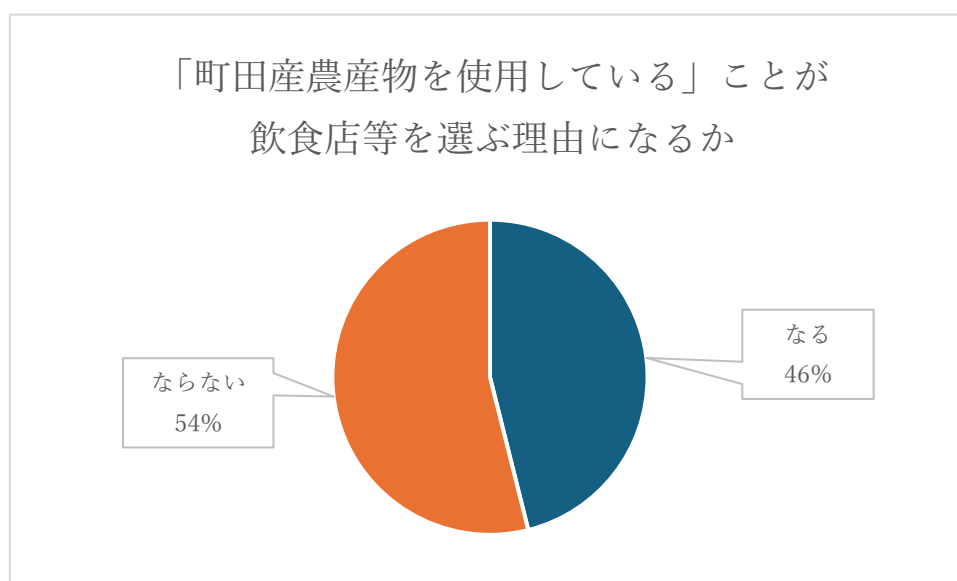
「購入したことがない」(34%)が最も多い回答でした。

「週1回以上」「1か月に2回以上」「1か月に1回以上」「3か月に1回以上」の回答を合わせると 26%に留まり、まち☆ベジの購入頻度は低く、多くの家庭で日常的に使われてないことがわかりました。



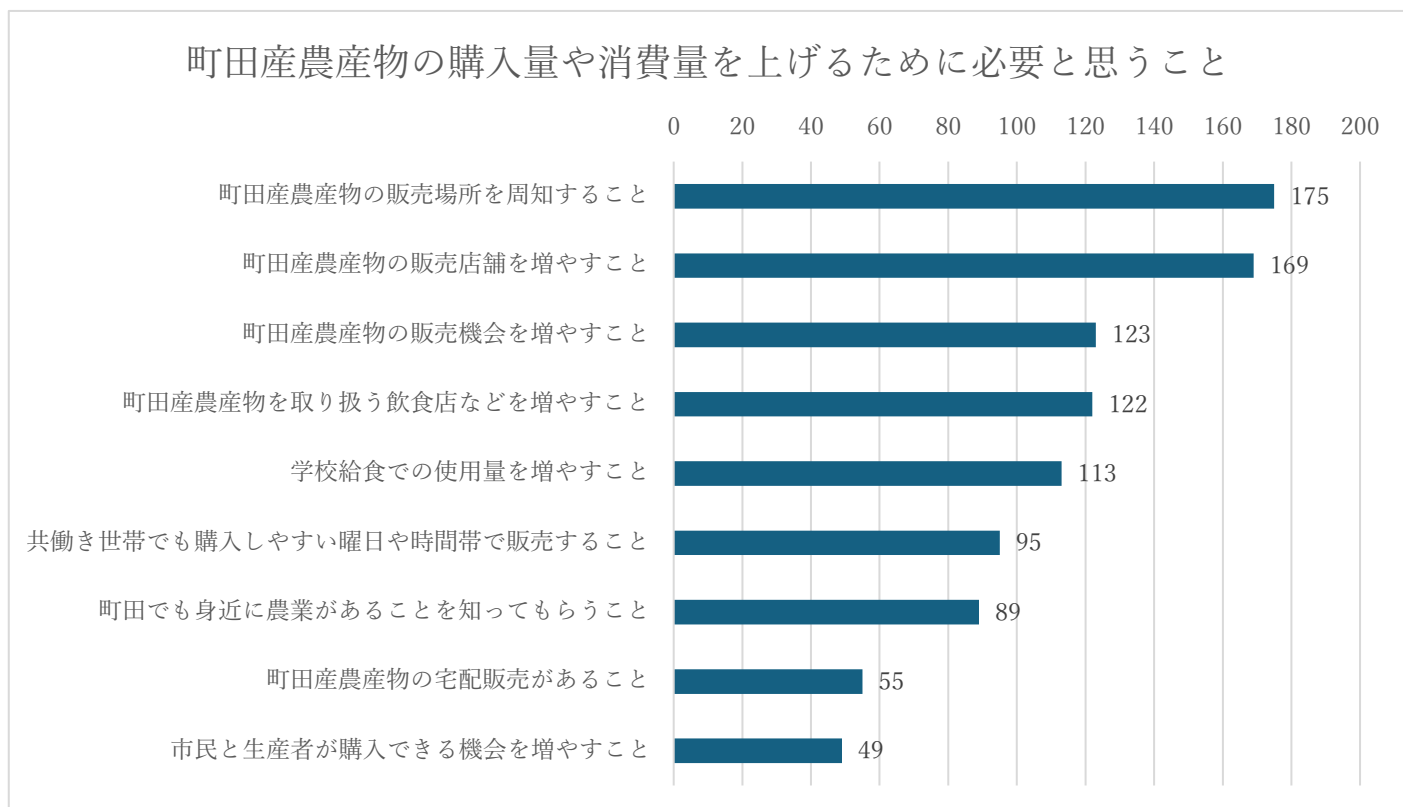
<「町田産農産物を使用している」ことが飲食店等を選ぶ理由になるか>

「町田産農産物を使用していることはお店を選ぶ理由になる」と回答した人は 46%、「お店を選ぶ理由にならない」と回答した人は54%でした。



<町田産農産物の購入量や消費量を上げるために必要と思うこと(複数回答)>

「町田産農産物の販売場所を周知すること」がもっと多く、次いで「町田産農産物の販売店舗を増やすこと」、「町田産農産物の販売機会を増やすこと」でした。販売場所や販売機会の増加が必要だという意見が多数でした。



4. まち☆ベジグルメ店アンケート

(1)調査名

次期農業振興計画策定に向けた市内農業に関する調査(まち☆ベジグルメ店)

(2)調査の目的

本調査は、市内農業の現状を把握し、次期農業振興計画検討の参考とすることを目的とする。

(3)調査対象者

まち☆ベジグルメ店登録事業者

(4)調査方法

郵送及びメールにてアンケート調査票を配布し、WEBで回答

(5)調査期間

2025 年 10 月 28 日から 2025 年 11 月 26 日まで

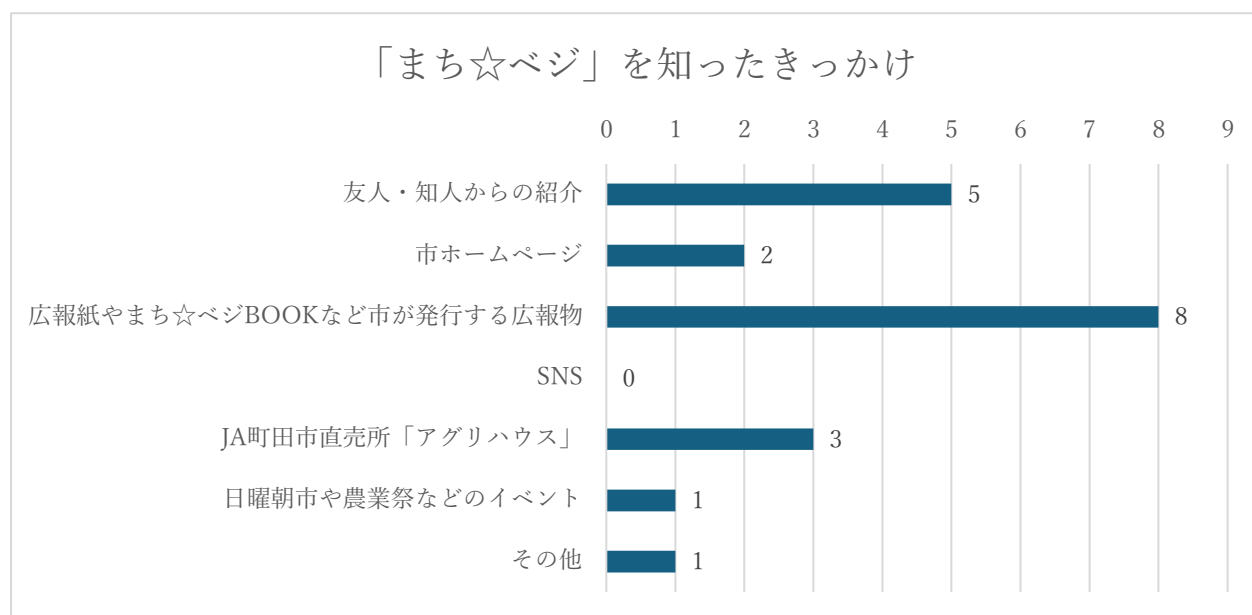
(6)回収数と回収率

対象者数	回答数	回答率
36 事業者	17 事業者	47.2%

(7)調査結果

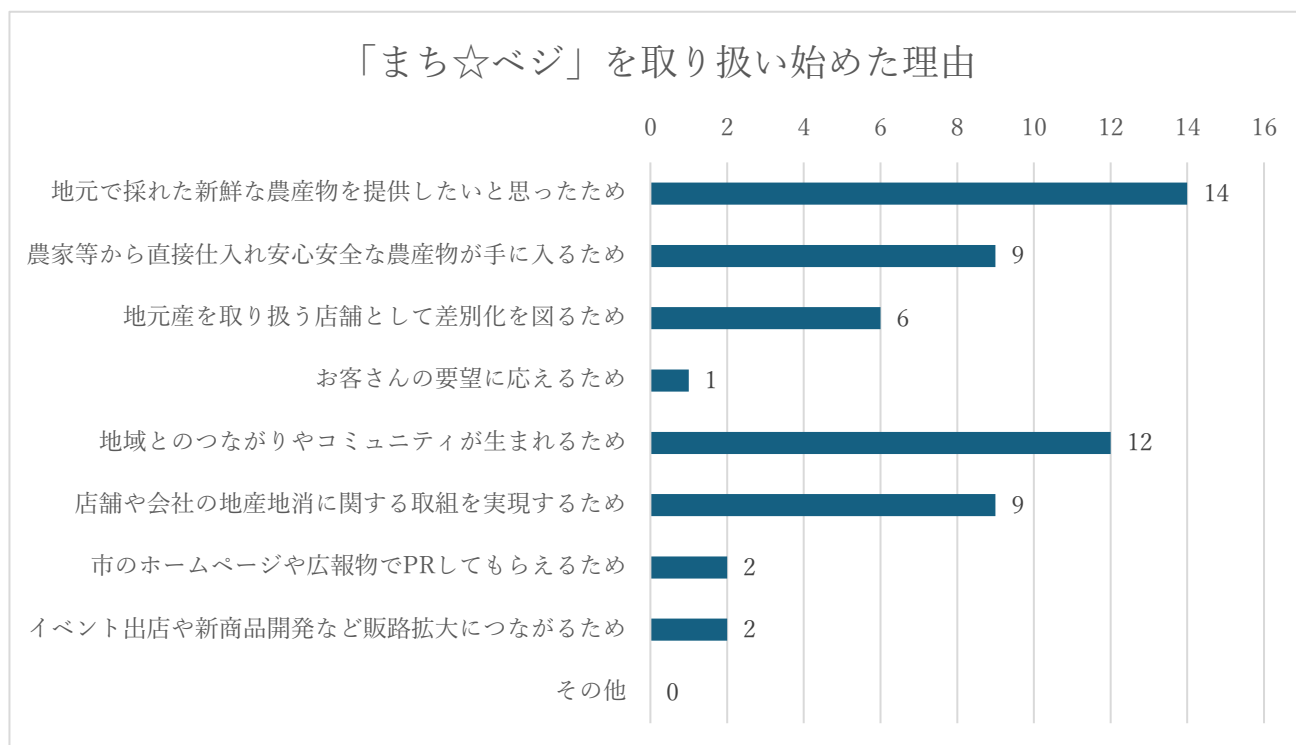
<「まち☆ベジ」を知ったきっかけ(複数回答)>

「広報紙やまち☆ベジBOOK など市が発行する広報物」が最も多く、次いで「JA 町田市アグリハウス」、「友人・知人からの紹介」という回答でした。「市ホームページ」の回答もあることから、まち☆ベジを知ったきっかけとしては市の広報媒体が多いことがわかりました。



＜「まち☆ベジ」を取り扱い始めた理由(複数回答)＞

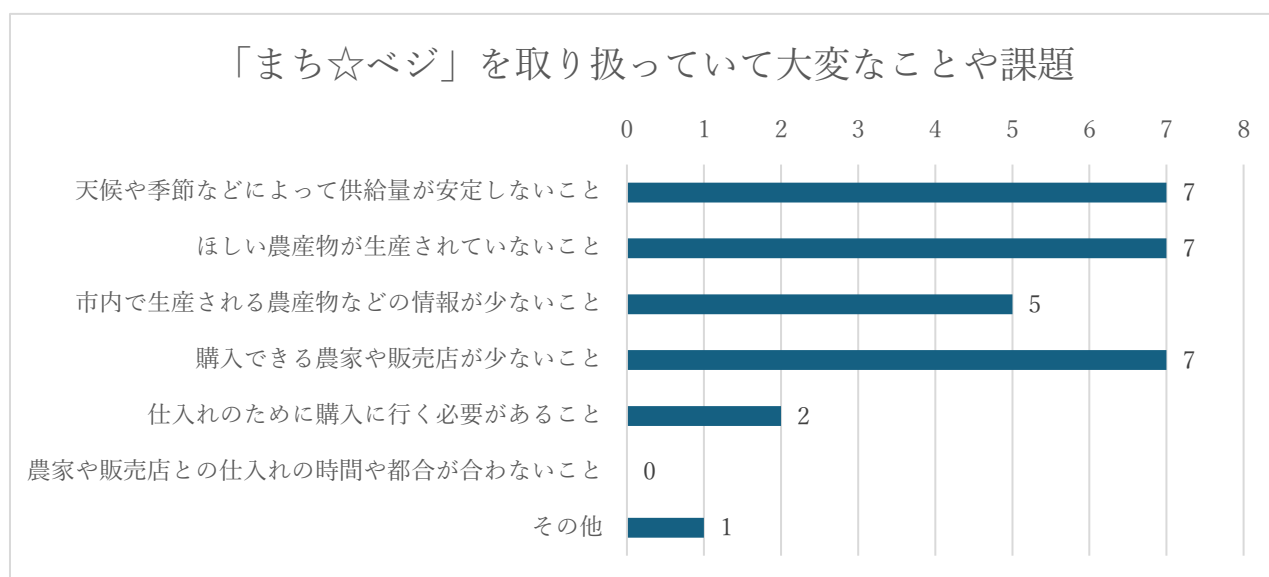
「地元で採れた新鮮な農産物を提供したいと思ったため」が最も多く、次いで「地域とのつながりやコミュニティが生まれるため」、「農家等から直接仕入れることで安心安全な農産物が手に入るため」「店舗や会社の地産地消に関する取組を実現するため」という回答でした。



＜「まち☆ベジ」を取り扱っていて大変なことや課題(複数回答)＞

「天候や季節などによって供給量が安定しないこと」「ほしい農産物が生産されていないこと」「購入できる農家や販売店が少ないこと」が同率で最も多い回答でした。供給量が不安定なこと、生産量や販売できる場所が少ないことが課題だという意見が多いことがわかりました。

次いで、「市内でどのような農産物が生産されているかなどの情報が少ないこと」となっており、町田産農産物に関する情報がまだまだ行き渡っていないことがわかりました。

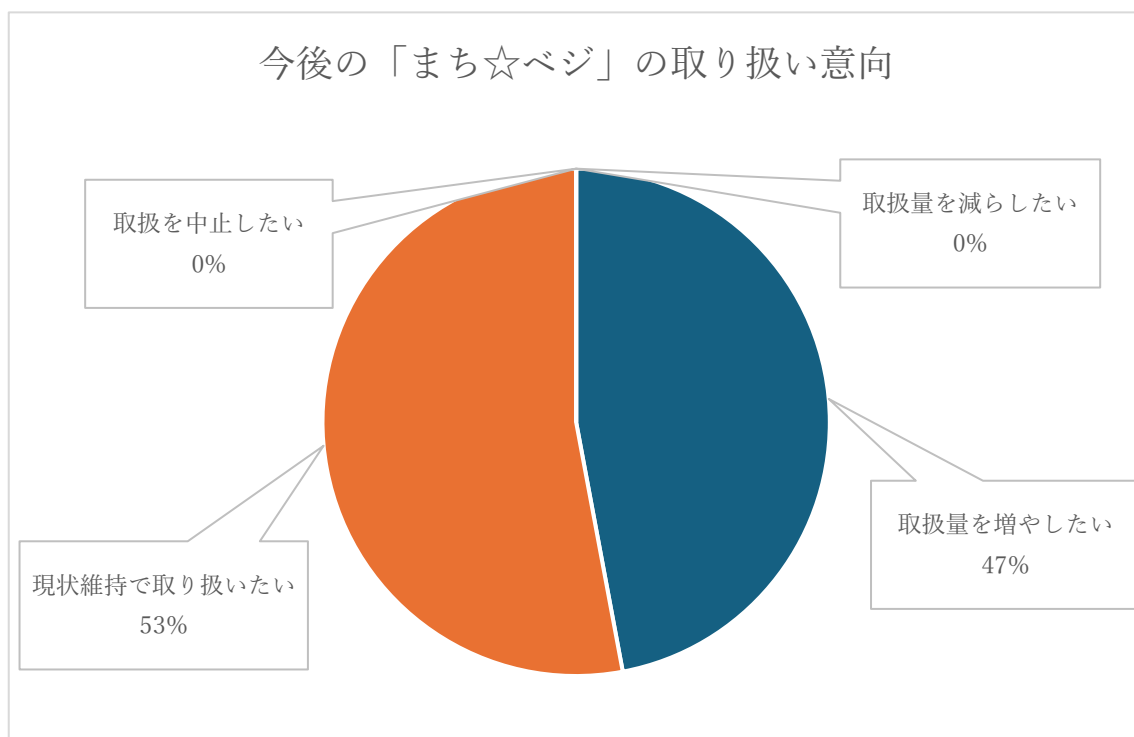


<今後の「まち☆ベジ」の取り扱い意向とその理由>

「現状維持で取り扱いたい」が最も多く、主な理由としては「現状が適量である」という回答でした。

次いで「取扱量を増やしたい」が多く、「今の場所で営業しているご縁からもっと取扱量を増やしたい」といった回答がありました。

まち☆ベジに対して好意的な事業者が多く、「取扱量を減らしたい」「取扱を中止したい」と回答した事業者はいませんでした。



<「まち☆ベジ」を取り扱っていてよかったこと(自由記述)>

- 「お客さんに喜んでもらえる」という意見が多くありました。また、「地域や農家さんとのつながりができた」との意見もあり、まち☆ベジを使うことで地元を受け入れられたと感じる事業者が多いようです。
- 「新鮮」「価格が安定している」「季節感がある」といった地場産ならではの魅力を感じるという意見もありました。

<その他、「まち☆ベジ」や町田の農業に関するご意見(自由記述)>

- 市民の購買意欲を高めるため、特徴あるまち☆ベジの生産やまち☆取扱店舗によるレシピ集の発行など市民にアピールできるような取組があるとよいとのご意見がありました。
- どの種類の野菜をどこで取り扱っているかなどの情報を提供してほしいという意見がありました。

5. 農業者及び関係団体へのヒアリング調査

町田市内の農業者及び農業関係団体に対してヒアリング調査を行いました。

(1) 収穫体験農園を運営する農業者

概要	
調査対象	M氏
調査日時	2025 年 11 月
収穫体験の品目	いちご
収穫体験の農地	生産緑地

①お客さんの属性

- 東京都、神奈川県、アジア圏(中国・台湾・タイ)から来られる方が多い。
- 年代は 20～60 代と幅広く、家族で来られる方がほとんどである。
- 新規のお客さんとリピーターのお客さんの割合は5:5くらいである。

②体験農園の PR 方法

- ホームページ、SNS(Facebook)、体験予約サイト(アソビュー、じゃらん)を使用している。

③体験農園を運営する上で大変なことや課題

- 1 番は、お客さんの安全管理である。動線の確保、ハサミの取り扱い、食べすぎによる嘔吐対応、ハウスの中を走らないよう注意喚起などをする。
- 2 番目は、イチゴの栽培管理である。農家として大切なことだと思っている。

④今後の体験農園の継続意向

- 拡大したいと考えている。
- 現在は加工と摘み取りを 3:7 くらいの割合で行っているが、もう少し年を取ったら加工の割合を増やしたいと考えている。
- 生産物の販売は、「摘み取り」「選別」「包装」などの手間がかかるのでやらない。

⑤体験農園を運営していてよかったこと

- 売上が予測できることと、お客さんとコミュニケーションが取れること。

⑥市民にもっと農業に親しんでもらうために必要だと思うこと

- GAP に基づいた農業生産工程管理が必要だと思う。
お客さん…安全安心なイチゴを食べることができる。
スタッフ…労働安全管理をしっかりすることで安心して作業ができる。
環境保全…イチゴの葉っぱをやぎに食べさせて堆肥にすることで廃棄物対策につながる。悪いイチゴは加工してフードロス対策となる。
- 当農園では環境保全型の農業が認められ、SDGs 認証を取得している。

⑦その他

- お客さんの安全管理及びスタッフのために、1 日あたりの来園数は 100 人以下を目安にしている。
- 収穫農園開園時は、1 つのハウスに 2 人程度、計 7 人程度のスタッフを配置する。農園スタッフのほか、NPO 法人たがやすととうきょう援農ボランティアから、ボランティアの方に来ていただく。

概要	
調査対象	O氏
調査日時	2025 年 11 月
収穫体験の品目	ブルーベリー
収穫体験の農地	市街化調整区域

①お客さんの属性

- 平日は年配の女性、休日は家族連れが多い。
- 近隣(市内、多摩市など)からの来園も多いが、コロナ禍以降は区部も多い。
- 新規のお客さんよりもリピーターのお客さんの方が多い。

②体験農園の PR 方法

- 口コミが多い。その他、ホームページ、広報まちだ、SNS(Instagram、Facebook)を使用している。
- あえて広報手段を限定的にしている。

③体験農園を運営する上で大変なことや課題

- ブルーベリーの味や品質の保持が大変である。
- お客さんが農園内に入るので、取りやすいように枝をそろえる、虫や枝で怪我をしないようするなど気を遣っている。
- 農薬を使っていないので、防除はすべて手作業で行っている。

④今後の体験農園の継続意向

- 自分の代は現状維持を考えている。後継者次第では拡大の可能性もある。

⑤体験農園を運営していてよかったこと

- お客さんに「楽しかった」「おいしかった」と言われると嬉しい。お客さんと会話できるのがよい。
- 収穫体験農園(観光農園)には需要があると感じており、やりがいや使命感を持って運営している。

⑥市民にもっと農業に親しんでもらうために必要だと思うこと

- 農産物がどのようにしてできているのか、という部分を PR できるとよいと思う。栽培後の姿は見ているが、生育中の農産物のことは知らない人が多い。
- 市内でも、木曽周辺は野菜がよくできる土があり、小山田の方はタケノコがおいしくできる砂地の山があるなど、土地に根付いた話をする子供だけ

でなく大人も興味を持っていることがわかる。

- 収穫体験などのイベントもできるとよいと思う。

⑦その他

- 収穫農園開園時は、1 日あたり 100 人ほどが来園する。
- 摘み取り体験後は、町田薬師池公園四季彩の杜西園へ向かったり、多摩市の方でご飯を食べたり、他の場所へ寄る方が多い。
- 摘み取りはパッケージ等の手間は無いが、落としたり食べられたりしてロスが多い。販売用のブルーベリーは別途栽培している。
- 西園の直売所で農産物を購入できるので、隣の育苗センターで関連イベントがあると面白いと思う。
- 農業者の共同加工所などがあってもよい、
- 若い人たちは一次産業をやりたがらない傾向にある。今後は加工や販売などの付加価値をつけたかたちで農業をやっていくのではないか。

概要	
調査対象	I氏
調査日時	2025 年 12 月
収穫体験の品目	ブルーベリー、夏冬野菜
収穫体験の農地	生産緑地

①お客さんの属性

- 家族連れと女性のグループが多い。
- アジア圏の外国の方も来園する。
- 電車で来られる方もいるが、車での来園も多い。一番遠くて愛知県から。
- 都内でレンタカーを借りて、午前中はブルーベリー狩り、午後はショッピングというように 1 日の予定を立てて来る方もいる。
- 新規のお客さんとリピーターのお客さんの割合は 7:3 くらいである。

②体験農園の PR 方法

- ホームページ、SNS(Instagram)、ブログ、体験予約サイト(じゃらん)を使用している。
- 町田市観光コンベンション協会にチラシの配布を依頼している。

③体験農園を運営する上で大変なことや課題

- 接客が大変。気遣いが大切である。
- スタッフがみんな同じことができるようにしている(家族+アルバイト)。野菜の収穫は、収穫方法などをつきっきりで説明することが大変である。
- 作物の出来も気を遣っている。

④今後の体験農園の継続意向

- 木が大きくなれば収量が上がるので、農地面積としては現状維持を目指している。
- 面積拡大ではなく、違う切り口で集客していきたい。滞在型ではなく回転率を上げる戦略を取っている。

⑤体験農園を運営していてよかったこと

- お客さんに喜んでもらえることが一番である。ブルーベリーは値段が高くても収穫体験ができることを喜ばれることが多い。

⑥市民にもっと農業に親しんでもらうために必要だと思うこと

- 収穫体験など、市民の「体験」ができる環境が必要だと思う。

- 体験の場を提供することで、農家が儲かっていかなければいけない。体験を提供すると他の作業ができないので、その分の補填が必要である(帆の金などの金銭的な補助、集客要員などの人力的な補助)。何かがないと、農家一人でやっていくのは厳しい。
- 市役所とのタイアップ企画があってもよい。
- やるからには「地元の人に認められたい」という意識が農家にはあると思う。

⑦その他

- ブルーベリーの収穫農園開園時は、午前中だけで150人ほどが来園する。
- 市内で就農するには、土地が足りないと感じている。

概要	
調査対象	S氏
調査日時	2025 年 11 月
農業体験の品目	26 種類程度(NPO 法人全国農業体験農園協会が提供する作付表に基づく)
農業体験の農地	生産緑地

①農園の概要

- 全 29 区画あり、すべて埋まっている状況である(毎年数名キャンセル有)。
- コロナ禍以降は安定して区画が埋まる。
- 農具は貸し出している。水道とトイレを設置している。
- 指導日を設けて植え付けなどを行っている。
- 平等性を確保するため、区画は毎年ローテーションしている。

②お客さんの属性

- 夫婦での利用、主に 50 歳代以上の利用が多い。
- 利用者のほとんどが近隣に在住していて、自転車で通う方が多い。
- 新規のお客さんよりも継続利用のお客さんが多い。募集時も、継続利用の方を優先している。

③体験農園の PR 方法

- 広報まちだ、市ホームページ、NPO 法人全国農業体験協会ホームページを使用している。
- コロナ前は看板を設置していたが、コロナ以降安定的に申込が入るようになったので、看板は外した。

④体験農園を運営する上で大変なことや課題

- 種の仕分け作業が大変である。
- 区画分けのために糸を張って準備することも大変。

⑤今後の体験農園の継続意向

- 現状がちょうどよいので、現状維持したいと考えている。

⑥その他

- 納税猶予を受けていると水洗トイレが設置できないなどの制約があるが、そういったものが無くなればもっと農業体験農園を開設する人が増えるのではないかと。

概要	
調査対象	K 氏
調査日時	2025 年 12 月
農業体験の品目	春植え付け・秋植え付けの野菜を年間 20 種類以上
農業体験の農地	生産緑地

①農園の概要

- 3m×10m を 1 区画として、80 区画程度ある。
- 1 年更新で、継続利用してよいこととしている。
- 水場などの関係で、区画は毎年変更している。
- 新規利用の方は見本区画の周辺に配置するようにしている。

②お客さんの属性

- 色んな方がいるが、最近は若い家族連れが増えてきた(30 歳代後半、小学生や未就学の子ども連れ)。
- 近隣在住の方の利用が多い。
- 新規のお客さんとリピーターのお客さんの割合は 2:8 くらいである。

③体験農園の PR 方法

- 広報まちだと口コミ。
- 途中辞退以外は定員が埋まっているが、募集宣伝が難しいと感じている。

④体験農園を運営する上で大変なことや課題

- 夏の暑さ対応が大変である。一昨年から夏は 17 時からの作業としている。
- 種の仕分け作業も大変。

⑤今後の体験農園の継続意向

- 少しは拡大できると考えている。
- 一人でやることが多いので、人手が足りていない(家族がたまに手伝う)。
- 援農ボランティアの活用もしていない。
- 堆肥まき作業など、昨年から利用者自身にやってもらっている。

⑥体験農園を運営していてよかったこと

- 人とのふれあいができること。
- 一人では所有農地すべてを耕すことができないので、農業体験農園にすることで自分の作業が減ること。

⑦市民にもっと農業に親しんでもらうために必要だと思うこと

- 体験農園などを通じて、みんなが楽しく交流する場が作れるとよいと思う。
- 収穫できる楽しさを体験できるとよい。

⑧その他

- 利用者募集時に、市の方でもっと目を引くPRをしてほしい。
- 体験農園を運営している農家同士の交流がないので、そういった場があるとよい。
- 体験農園をやっているけど、後継ぎがない。
- 利用者同士の交流のため、年 1 回「農園交流会」を行っている。畑のハウス内ですいとんを作ってふるまっている。
- 体験農園を運営するのは、最初が大変である。場所の整備、物品調達、トイレや水場の整備が必要になる。
- NPO 法人全国農業体験協会があるが、協会に入っていない方もいる。

(2)農業に関する取組を行う特定非営利活動法人

概要	
調査対象	NPO 法人たがやす
調査日時	2025 年 11 月

【NPO法人たがやす】とは？

市民と農家を対象に、農に関するさまざまな事業を行っている団体です。主に下記 4 つの事業に取り組み、そのうち【研修農場事業】と【援農ボランティア事業】は町田市から委託を受けて事業を行っています。

- 援農事業(育成研修も含む)
- 地場野菜普及活動
- 研修農業事業・援農ボランティア育成事業
- 体験農園事業

①農業研修事業のうまくいっている点や課題など

- 当初は、NPO 法人の活動のライバルになる恐れがあることや修了後に市内で借りられる農地が無いことから、事業実施に反対していた。
- 都内初の市町村が実施する研修事業としてできたことがよかった。
- 研修生同士で新たなコミュニティが形成できるところがよいと思う。
- 町田で就農したいと考える人が多くいることがよい。
- 研修農業修了後、就農するための農地が町田市内に無いので、相模原市などの市外に新規就農が流れていってしまうことが課題である。

②援農ボランティア事業のうまくいっている点や課題など

- 団体独自のプログラムで事業を行っており、見本が無いので正しいかどうか分からない(ボランティアを雇用するのではなく謝礼型を取っている)。
- 若い人が少ない印象があるので、援農が楽しいということをどう見せるかが重要だと思う。
- 農家の世代交代が進むと、援農ボランティア事業も少し変わると思う。
- たがやすを通じて援農ボランティアに行く方の 7 割が援農ボランティア関連事業の出身であることから、事業が活用されていることがわかる。
- 定年後も働く方が多い時代になったが、まだまだダブルワークが認められない風潮にあるため、援農者が少ないことが課題である。

- 「とうきょう援農ボランティア」は手軽に登録できるところが魅力だが、農家さんとの信頼関係の相性もあるので、たがやすから援農を派遣するときは慎重に行っている。

③市内で農業の担い手を増やすために必要だと思うこと

- 農地が無いことがネックになっているので、対応が必要だと思う。

④市民にもっと農業に親しんでもらうために必要だと思うこと

- 20年前と比べると、今の町田市はいろいろな取組をやっていると思う。
- 講演があると、町田は体験農園・市民農園・研修農場があることを話す。
- 東京都の補助金を活用するなどして、農業体験農園を開設していけるとよいと思う。

⑤市内で農業者が農業経営をしていく上で課題だと思うこと

- 生産緑地所有者も市街化調整区域所有者も、後継ぎがいなかったことが大きな課題だと思う。
- 後継者の問題など、農業者から相談があったときはJAに繋いでいる。JAとの連携が必須である。
- 農業体験農園であれば高齢になってもできるので、もっとPRが必要だと思う。
- 八王子市には、複数の市民農園を管理している団体があるので、そういった団体が町田にもあるとよい。

⑥町田産農産物の消費量と生産量を増やし、町田の農業を振興していくために必要だと思うこと

- 若い人たちが「まち☆ベジ」を食べない理由として、普段行くところに売っていないということがあると思う。
- 町田市民をカバーできるほど「まち☆ベジ」が生産できていないのも事実である。
- 地場産農産物のことをいかに理解してもらうかが重要。そのためには、野菜のおいしさをどこで分かってもらえるかだと思う。
- 農業振興するにあたっては、野菜の配送・流通がネックになってくる。

⑦その他

- 生産緑地が無くなっていってしまうのは、国の施策に問題があると思う。

(3)農福連携に関する取組を行う特定非営利活動法人

概要	
調査対象	NPO 法人町田フレンズサポート
調査日時	2025 年 12 月

【NPO法人町田フレンズサポート】とは？

障害のある方々が就労支援を行う団体。市立総合体育館内で就労継続支援 B 型のレストランを運営しています。

コロナ禍 2 年間にレストラン営業が大きな打撃を受けたことから、レストラン営業以外の収入を得るために、団体職員が町田市農業研修を受講・修了して法人として担い手バンクに登録し、農業経営基盤強化促進法により市内 2 か所の農地(三輪町及び図師町の田んぼ)を借りています。該当農地ではメンバー(通所している障がいのある就労者)が農作業をし、生産される米をレストランで提供したり酒米を加工販売したりすることで新たな収入が生まれました。また、田植えから収穫・もちつきまでを体験できる市民参加型「ともだちたんぼまちだ」事業を運営しています。

①団体が行っている農業に関する取組「まち☆ベジ」を知ったきっかけ

- 農福連携事業の実施
- まち☆ベジグルメ店の運営
- 町田産農産物の販売

②「まち☆ベジ」を知ったきっかけ

- 「まちだベジハブ(※)」出店時に、担当者から声をかけてもらったこと。当時、乾燥野菜を使用した「八味唐辛子」を作っていた。
- 野菜の直売をするためには、市から生産者を紹介いただいた。

③「まち☆ベジ」を取り扱い始めた理由

- コロナ禍の 2021 年～2022 年頃から取り扱いを始めた。
- 市内の生産者とながかりを持つことで地場野菜が食材として安定的に供給できるようになる。
- 買い取り方式を採用し、SNS(LINE)でやりとりして生産者のもとへ取りに行っている。現在は 3 件の生産者の農産物を取り扱っている。

- 生産者の方で扱いに困っている野菜などあった、それを加工しレストランでも提供している。

④「まち☆ベジ」を取り扱う上で大変なことや課題

- 生産者から直接仕入れを行っているため、遠方の生産者のもとへ行く頻度が下がってしまうこと。
- 生産者側としては朝早くや夕方に農産物を取りに来てほしいようだが、団体側としてはメンバーの勤務時間内に取りに行けるとその方の仕事になるので、こまめにやりとりしながら調整している。

⑤今後の「まち☆ベジ」の取り扱い意向

- レストラン・直売所ともに今の状況がちょうどよいので、現所維持していきたい。主に火曜日と金曜日に販売というスタイルが定着している。
- 現状維持しつつも、さらにいろいろな野菜を取り入れてみたい。

⑥「まち☆ベジ」を取り扱っていてよかったこと

- 生産者とのつながりができて、おいしくて新鮮な野菜をレストランや直売所で提供でき、イベントでも協力できていること。
- 周辺にスーパーが少ない土地柄、卓球やバドミントンのために来館している方や地域の年配の方など、なじみのお客さんが増えたことがありがたいと感じている。

⑦農福連携事業の現状

- 作業の連携
→メンバーは草取り、水入れ、水抜きなどの田んぼの管理作業を行っている。また、市民参加イベントの際に準備、片付け、清掃の作業をしている。
- 交流の連携
→主に町田市民を対象とした稲作体験を行い、障がいのある方・ない方が交流できる機会を創出している。また、市内及び品川区の放課後等デイサービスの子どもたちに田んぼで稲作体験をしてもらうことで、障害を持つ子どもたちが豊かな自然の中でのびのび過ごす環境を提供できている。
- 作業の連携
→農産物の仕入れにメンバーが同行して野菜を運び、店頭に立って接客と販売をしている。以前は野菜の乾燥加工も行っていたが、現在はメンバーの作業体制と品質管理の見直しを図っている。

⑧農福連携事業で生産した農産物の活用

- 酒米は日本酒に加工し、「ともだちたんぼまちだ」参加者へのリターン品となるほか、レストランでの提供、市内酒屋での販売を行っている。
- 食米は「ともだちたんぼまちだ」参加者へのリターン品としている。残った米については、今年度は大相撲町田場所の弁当に使用した。
- もち米は放課後等デイサービスでの「出張餅つき隊」で使用。ついた餅はのしておかきもちにするとともに、並行して餅つき機でついた餅を子どもたちに提供する。
- 「ともだちたんぼまちだ」の参加費収益と「出張餅つき体験」参加費収益など、農福連携を行うことで付随して実施できる体験を売り、メンバーの工賃としている。

⑨生産した農産物について新たに増やしたい販路や活用先

- 日本酒の生産量が増えた場合、ふるさと納税の返礼品などにできたらよいと考えている。

⑩市内で農福連携を進めていく上での課題

- 当団体の場合、農作業を行うメンバーの高齢化による作業能力の減衰が課題となっている。今までできていたことができなくなってしまう、支援員の作業が増えている。
- 農福連携を進めていくにあたっては、メンバーのできることを常に把握し、負担の少ない形で継続的にできるようなものを組み立てていくことが大切だと思う。
- 1つの事業所の利用者ができることはとても限られているため、市内の福祉連施設同士で連携して取り組める場を作っていけるとよいと思う。作業に特化した法人もあれば、加工・販売・イベントなどで頑張ることができる法人もあるので、うまくつながりが持てるとよい。

※ まちだベジハブ

市では、都市農地の保全・星農業の活性化を目指して、地元の農業者とまちだの農に関心がある市民や企業などをつなぐプラットフォームの形成やそこから生まれた取組を「まちだベジハブ」と呼んでいます。マルシェの開催や援農ボランティアの拡充、農に関する意見交換の場づくりなど、市民と農をつなぐ活動を行っています。

(4)農産物の直売や活用に関する取組を行う事業者

概要	
調査対象	NEST Machida
調査日時	2025 年 12 月

【NEST Machida】とは？

「町田薬師池公園四季彩の杜 西園」は、薬師池公園四季彩の杜の玄関口として、2020 年 4 月にオープンした公園です。正面のウェルカムゲートエリアには、町田産農産物等を取り扱う直売所や町田産の食材を使ったメニューを提供するカフェレストラン、クラフト体験などができる体験工房、さまざまなイベントが実施される芝生広場などがあるほか、体験農園や JA 町田市が運営している育苗センターも内包しています。

NEST Machia(株式会社富士植木、日本コンベンションサービス株式会社、株式会社キープ・ウィルダイニング)は、西園の指定管理者として公園の管理・運営を行っていて、直売所やカフェレストランの運営は株式会社キープ・ウィルダイニングが担っています。

①直売所に「まち☆ベジ」を納品している経営体数

- 39 経営体で、うち委託販売が 26 経営体、買取販売が 13 経営体である。
- 年間 500 種類以上の品目を取り扱っている。
- 納品する農産物は各農家に任せているので、他の方と同じにならないようにいろんな種類の農産物をお持ちいただいているようである。

②直売所のお客さんの属性

- 40 歳代～50 歳代の女性が 7 割を占めている。
- 休日はファミリー層が若干多くなるが、全体的な傾向は平日と変わらない。
- 車で来園し、犬の散歩をして 1 時間以内に帰る方が多い。

③「まち☆ベジ」を取り扱う上で大変なことや課題

- スーパーよりも販売価格が高いため、その分付加価値や魅力を伝える工夫をしている(野菜の紹介や食べ方を記載した手書きのポップなど)。
- 農薬が少ない野菜だと虫食いがあるので、その手入れも必要である。
- 端境期はあるが旬のものを取り扱っている以上仕方ないことだと思っている。端境期は野菜以外の割合を多くするなどの工夫をしている。

④店頭で品物が無くなった時の対応

- 事業者側から追加納品等の依頼は行っていない。
- 納品している生産者に対して、商品在庫に関するメールを毎日 3 回送付している。各生産者はそれを確認し、各自の判断で納品していただいている。

⑤「まち☆ベジ」を取り扱っていてよかったこと

- お客さんとの会話やコミュニケーションのきっかけとなる。
- 企業のブランディングの一つになる。

⑥カフェレストランのお客さんの属性

- 直売所よりも若年層の来店が多い傾向で、20 歳代～60 歳代が多い。
- 男女比は女性が圧倒的に多い。

⑦カフェレストランで「まち☆ベジ」を取り扱い始めた理由

- 「まち☆ベジ」を取り扱うことで付加価値がつくと考えた。

⑧今後の「まち☆ベジ」の取り扱い意向

- 現状維持を考えている。
- カフェレストランの新メニュー開発時など、野菜を使うことをベースに考えることもある。

⑨その他

- 直売所に納品された野菜は、西園のカフェレストランの他に町田駅前にある系列飲食店でも使用している。西園ができたことで、野菜の流通拠点ができ、会社として「まち☆ベジ」の取扱量が増えた。

6. 農業者及び関係団体へのヒアリング調査

町田市内にあるスーパー等の小売店のうち、「まち☆ベジ」を販売している店舗に対してヒアリング調査を行いました。

概要	
調査対象	野菜のナイトウ (所在地:町田市成瀬)
調査日時	2025 年 12 月

①「まち☆ベジ」を知ったきっかけ

- 先代の社長が地場産野菜(横浜市・町田市)を取り扱うようになったため。

②「まち☆ベジ」を取り扱い始めた理由

- 地場産は産地と消費地が近いので、収穫・納品してから販売までのスピード感が違うため。
- 生産者の「顔」が見えるため。

③「まち☆ベジ」を取り扱い始めた時期

- 正確な時期は不明だが、少なくとも 15 年以上前から取り扱っている。

④「まち☆ベジ」の仕入先

- 小野路や小山田などの個人農家 4～5 件から直接仕入れている。そのうち 1 件は年間を通じて契約している。
- 年間を通じて季節の野菜を取り扱っている。

⑤「まち☆ベジ」を取り扱う上で大変なことや課題

- 供給が安定していないこと。一人で農業をされている方と契約していても、天候不順などで作物がまったくできなくなってしまうことがある。
- 納品に来ていただいているので、流通の問題もある。

⑥今後の「まち☆ベジ」の取り扱い意向

- できるなら取扱量を増やしていきたい。地元農家が生産するキノコや夏野菜、ブドウは特に人気がある。

⑦「まち☆ベジ」を取り扱っていてよかったこと

- 一部コンビニに納品しているが、夏野菜は特に人気が高い。地元野菜を消費したいという消費者の要望があることがわかる。

概要	
調査対象	相鉄ローゼン薬師台店 (所在地:町田市薬師台)
調査日時	2025 年 12 月

①「まち☆ベジ」を知ったきっかけ

- 不明。

②「まち☆ベジ」を取り扱い始めた理由

- 会社の方針として、地場野菜を取り扱うようにしている。

③「まち☆ベジ」を取り扱い始めた時期

- 不明。

④「まち☆ベジ」の仕入先

- 個人農家 2 件と契約している。
- 買い取り方式を取っている。
- 年間を通じて季節の野菜を取り扱っている。

⑤「まち☆ベジ」を取り扱う上で大変なことや課題

- 供給が安定していないこと。端境期などは農産物が少なくなる。その場合は売り場の調整を行っている。

⑥今後の「まち☆ベジ」の取り扱い意向

- 地場産は新鮮で品質がよいので、できるなら取扱量を増やしていきたい。

⑦「まち☆ベジ」を取り扱っていてよかったこと

- お客さんの反応がよい。新鮮なものが求められている。
- 生産農家は開店直後に納品に来るが、その時にはお客さんが待っていて、農家さんと直接会話しながら野菜を購入している。

概要	
調査対象	カインズ町田多摩境店 (所在地:町田市小山ヶ丘)
調査日時	2025 年 12 月

①「まち☆ベジ」を知ったきっかけ

- 前任者からの引継ぎで知った。

②「まち☆ベジ」を取り扱い始めた理由

- 市内に流通していない、形や色が悪いなどの野菜についても、気軽に市民に触れてほしいという思いから。

③「まち☆ベジ」を取り扱い始めた時期

- 1～2 年前から取り扱い始めた。

④「まち☆ベジ」の仕入先

- 町田市農業協同組合と契約し、仕入れている。
- 野菜、果物全般を取り扱っている。

⑤「まち☆ベジ」を取り扱う上で大変なことや課題

- 大変なことなどは特にない。町田の農業への貢献のために取り組んでいる。

⑥今後の「まち☆ベジ」の取り扱い意向

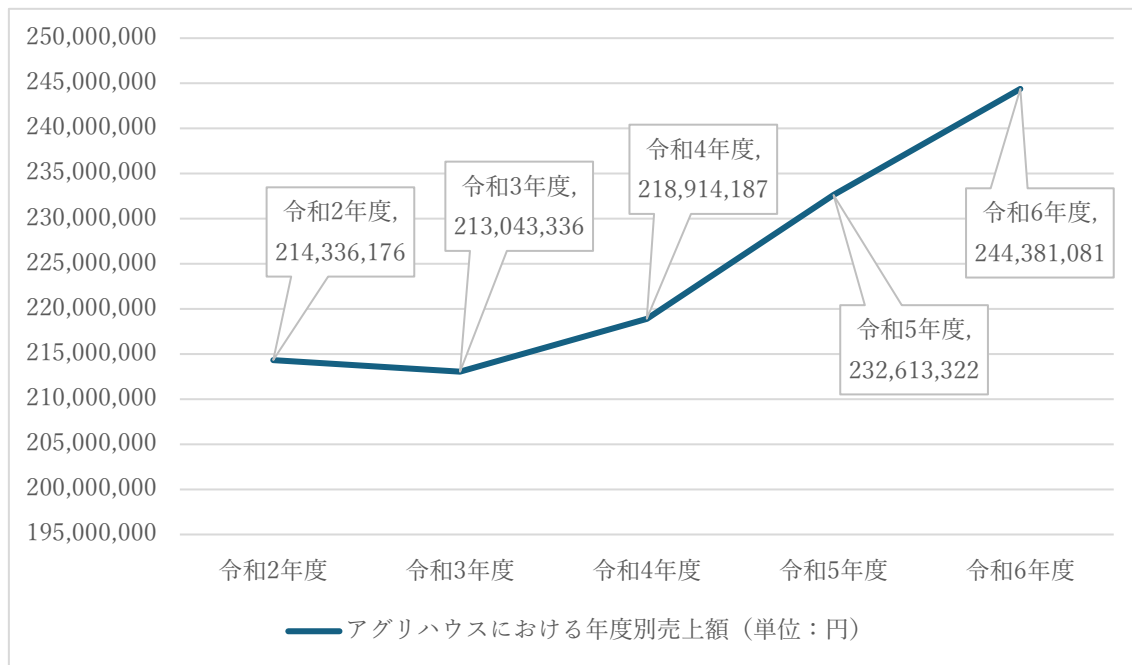
- 町田の農家のために、また市民のために少しでも貢献できればとの思いで取り組んでいるので、できれば取扱量を増やしていきたい。

⑦「まち☆ベジ」を取り扱っていてよかったこと

- 通常出荷が困難な形や色がそろわない野菜も販売することで、町田の農業振興のために一役を担えていること。

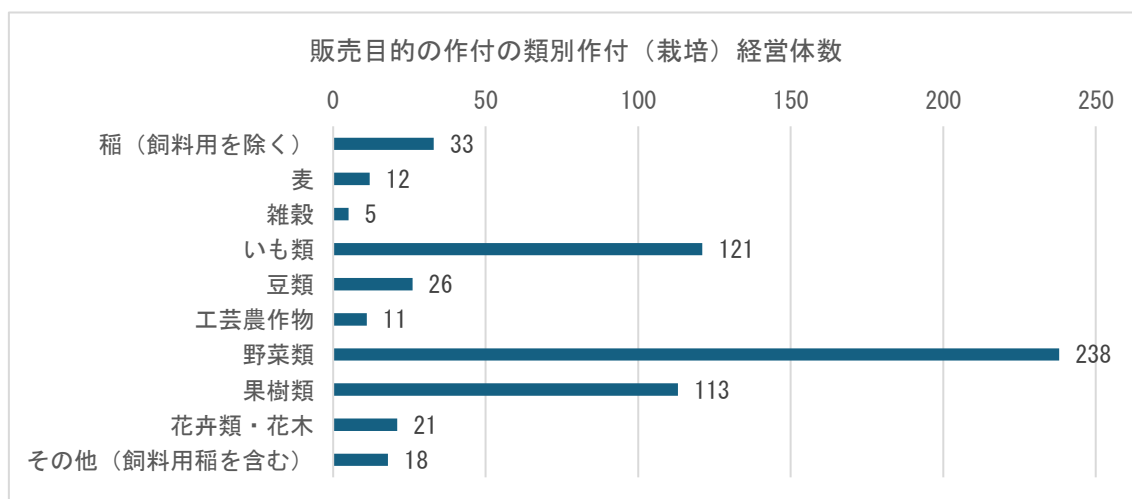
6. JA町田市直売所「アグリハウス」における年度別売上

JA町田市が運営する直売所「アグリハウス」における年度別売上は、次のとおりです。



7. 町田市の営農状況

「農林業センサス 2020」からみる販売目的の作付の種別作付(栽培)経営体数は、次のとおりです。



8. 他自治体との比較

	2024（令和6）年度						2023（令和5）年度						2022（令和4）年度						2021（令和3）年度						2020（令和2）年度					
	農地面積 （R6）	市街化区 域農地面 積（R6）	うち生産緑 地面積 （R7）	市街化調 整区域農 地面積 （R6）	農業産出額（R5）	作付延べ面積（R5）	農地面積 （R5）	市街化区 域農地面 積（R5）	うち生産緑 地面積 （R6）	市街化調 整区域農 地面積 （R5）	農業産出額（R4）	作付延べ面積（R4）	農地面積 （R4）	市街化区 域農地面 積（R4）	うち生産緑 地面積 （R5）	市街化調 整区域農 地面積 （R4）	農業産出額（R3）	作付延べ面積（R3）	農地面積 （R3）	市街化区 域農地面 積（R3）	うち生産緑 地面積 （R4）	市街化調 整区域農 地面積 （R3）	農業産出額（R2）	作付延べ面積（R2）	農地面積 （R1）	市街化区 域農地面 積（R2）	うち生産緑 地面積 （R3）	市街化調 整区域農 地面積 （R2）	農業産出額（R1）	作付延べ面積（R1）
町田市	470.7ha	259.9ha	184.0ha	210.7ha	野菜 1,582百万円 果樹 134百万円 花卉 83百万円 （合計 1,818百万円）	野菜 337.9ha 果樹 74.9ha 稲・麦類 12.2ha （合計 447.9ha）	482.4ha	270.1ha	189.2ha	212.4ha	野菜 1,594百万円 果樹 133百万円 花卉 84百万円 （合計 1,832百万円）	野菜 339.6ha 果樹 74.6ha 稲・麦類 14.2ha （合計 452.0ha）	490.6ha	274.7ha	197.9ha	215.8ha	野菜 1,610百万円 果樹 136百万円 花卉 85百万円 （合計 1,853百万円）	野菜 343.0ha 果樹 75.9ha 稲・麦類 16.3ha （合計 460.5ha）	500.0ha	282.9ha	203.0ha	218.0ha	野菜 1,633百万円 果樹 139百万円 花卉 87百万円 （合計 1,881百万円）	野菜 347.9ha 果樹 77.5ha 稲・麦類 17.3ha （合計 468.9ha）	509.0ha	292.0ha	208.3ha	217.0ha	野菜 1,635百万円 果樹 145百万円 花卉 90百万円 （合計 1,893百万円）	野菜 348.2ha 果樹 80.9ha 稲・麦類 17.3ha （合計 473.8ha）
八王子市 ※農業振興地域農 用地区域外	756.1ha	341.3ha	203.5ha	414.8ha	野菜 2,205百万円 果樹 162百万円 花卉 62百万円 （合計 2,465百万円）	野菜 465.3ha 果樹 173.7ha 稲・麦類 28.3ha （合計 721.5ha）	765.7ha	352.7ha	208.0ha	412.9ha	野菜 2,211百万円 果樹 189百万円 花卉 63百万円 （合計 2,500百万円）	野菜 466.6ha 果樹 173.5ha 稲・麦類 30.0ha （合計 725.0ha）	773.9ha	349.2ha	218.5ha	424.8ha	野菜 2,234百万円 果樹 187百万円 花卉 64百万円 （合計 2,523百万円）	野菜 471.3ha 果樹 175.9ha 稲・麦類 32.0ha （合計 735.0ha）	781.4ha	358.6ha	222.1ha	422.8ha	野菜 2,236百万円 果樹 189百万円 花卉 64百万円 （合計 2,526百万円）	野菜 471.8ha 果樹 178.3ha 稲・麦類 31.0ha （合計 738.3ha）	792.1ha	366.5ha	223.1ha	425.6ha	野菜 2,245百万円 果樹 191百万円 花卉 64百万円 （合計 2,540百万円）	野菜 473.7ha 果樹 179.2ha 稲・麦類 34.0ha （合計 744.6ha）
あきる野市 ※農業振興地域農 用地区域外	514.4ha	104.5ha	62.3ha	409.9ha	野菜 859百万円 果樹 57百万円 花卉 36百万円 （合計 1,004百万円）	野菜 180.0ha 果樹 74.5ha 稲・麦類 18.0ha （合計 288.1ha）	518.2ha	107.8ha	62.8ha	410.3ha	野菜 864百万円 果樹 58百万円 花卉 36百万円 （合計 1,011百万円）	野菜 181.0ha 果樹 75.8ha 稲・麦類 18.0ha （合計 291.4ha）	521.1ha	108.6ha	64.1ha	412.6ha	野菜 867百万円 果樹 58百万円 花卉 37百万円 （合計 1,016百万円）	野菜 181.5ha 果樹 76.0ha 稲・麦類 19.0ha （合計 293.2ha）	526.7ha	113.9ha	65.4ha	412.8ha	野菜 874百万円 果樹 59百万円 花卉 37百万円 （合計 1,025百万円）	野菜 182.9ha 果樹 76.6ha 稲・麦類 19.0ha （合計 295.8ha）	529.9ha	110.1ha	67.0ha	419.8ha	野菜 883百万円 果樹 60百万円 花卉 37百万円 （合計 1,036百万円）	野菜 184.7ha 果樹 78.1ha 稲・麦類 20.0ha （合計 300.3ha）
青梅市 ※農業振興地域農 用地区域外	407.2ha	210.9ha	113.1ha	196.3ha	野菜 868百万円 果樹 91百万円 花卉 14百万円 （合計 998百万円）	野菜 191.7ha 果樹 97.6ha 工芸農作物 49.1ha （合計 387.7ha）	435.8ha	176.7ha	117.0ha	259.1ha	野菜 883百万円 果樹 92百万円 花卉 15百万円 （合計 1,014百万円）	野菜 195.0ha 果樹 98.8ha 工芸農作物 49.7ha （合計 391.3ha）	440.3ha	176.8ha	123.2ha	263.5ha	野菜 885百万円 果樹 92百万円 花卉 15百万円 （合計 1,017百万円）	野菜 195.5ha 果樹 99.0ha 工芸農作物 49.8ha （合計 393.5ha）	443.5ha	181.2ha	125.5ha	262.3ha	野菜 895百万円 果樹 93百万円 花卉 15百万円 （合計 1,029百万円）	野菜 197.7ha 果樹 100.2ha 工芸農作物 50.4ha （合計 397.8ha）	443.2ha	185.4ha	127.9ha	257.8ha	野菜 906百万円 果樹 94百万円 花卉 15百万円 （合計 1,042百万円）	野菜 199.1ha 果樹 100.6ha 工芸農作物 50.6ha （合計 401.1ha）
立川市	234.9ha	215.3ha	185.1ha	19.6ha	野菜 751百万円 グランドカバー類 136百万円 果樹 134百万円 （合計 1,033百万円）	野菜 169.4ha 果樹 86.0ha 果樹 31.0ha （合計 311.0ha）	239.7ha	219.0ha	186.2ha	20.7ha	野菜 741百万円 グランドカバー類 138百万円 果樹 134百万円 （合計 1,025百万円）	野菜 170.1ha 果樹 87.5ha 果樹 30.9ha （合計 313.1ha）	243.2ha	220.4ha	194.4ha	22.9ha	野菜 754百万円 グランドカバー類 141百万円 果樹 137百万円 （合計 1,045百万円）	野菜 172.9ha 果樹 88.9ha 果樹 31.6ha （合計 318.7ha）	246.3ha	222.2ha	196.0ha	24.1ha	野菜 764百万円 グランドカバー類 143百万円 果樹 140百万円 （合計 1,061百万円）	野菜 175.3ha 果樹 90.2ha 果樹 33.4ha （合計 323.8ha）	249.0ha	225.6ha	197.0ha	23.6ha	野菜 765百万円 グランドカバー類 148百万円 果樹 143百万円 （合計 1,073百万円）	野菜 175.5ha 果樹 93.9ha 果樹 33.0ha （合計 329.5ha）
武蔵村山市	167.7ha	108.3ha	79.5ha	59.4ha	野菜 220百万円 果樹 39百万円 花卉 5百万円 （合計 266百万円）	野菜 49.6ha 果樹 10.4ha 工芸農作物 6.7ha （合計 69.8ha）	171.3ha	113.4ha	81.7ha	57.9ha	野菜 267百万円 果樹 51百万円 花卉 7百万円 （合計 329百万円）	野菜 60.6ha 果樹 17.9ha 工芸農作物 9.6ha （合計 94.3ha）	172.5ha	111.9ha	86.1ha	60.7ha	野菜 291百万円 果樹 45百万円 花卉 7百万円 （合計 346百万円）	野菜 67.7ha 果樹 14.2ha 工芸農作物 10.2ha （合計 98.1ha）	174.6ha	113.7ha	86.4ha	60.9ha	野菜 280百万円 果樹 47百万円 花卉 20百万円 （合計 350百万円）	野菜 64.6ha 果樹 12.1ha 工芸農作物 10.3ha （合計 93.8ha）	176.5ha	116.2ha	87.5ha	60.3ha	野菜 315百万円 果樹 44百万円 花卉 18百万円 （合計 391百万円）	野菜 74.0ha 果樹 12.1ha 工芸農作物 10.6ha （合計 104.2ha）

【農林業センサス】より

	2020年					2015年			
	総農家数	販売農家数	農業従事者数（※）	基幹的農業従事者数（※）	基幹的農業従事者の平均年齢	総農家数	販売農家数	農業就業人口（※）	農業就業人口の平均年齢
町田市	659戸	279戸	781人	456人	69.3歳	849戸	374戸	671人	66.5歳
八王子市	1,012戸	324戸	736人	468人	67.4歳	1,197戸	392戸	693人	66.2歳
あきる野市	646戸	168戸	378人	225人	71.0歳	711戸	197戸	337人	67.6歳
青梅市	604戸	127戸	289人	153人	69.4歳	697戸	191戸	276人	68.8歳
立川市	277戸	209戸	646人	413人	62.5歳	341戸	269戸	583人	59.3歳
武蔵村山市	265戸	128戸	331人	208人	67.9歳	327戸	167戸	291人	65.8歳
東京都計	9,567戸	4,606戸	12,416人	7,974人	65.6歳	11,222戸	5,623戸	10,986人	63.9歳
多摩計	7,562戸	3,465戸	9,467人	—	65.4歳	8,876戸	4,236戸	8,423人	64.4歳

※2020年（令和2）年の農林業センサスで、「農業就業人口」の公表が原則廃止され、代わりにより範囲の広い「農業従事者」と経営の核となる「基幹的農業従事者」の2つに整理されました。

①農業従事者（もっとも広い範囲）：15歳以上の世帯員で、過去1年間に1日以上自営農業に従事した人すべてを指す。

②農業就業人口（2015年までの主要指標）：農業従事者のうち、ふだんの生活や主な状態が「自営農業に従事している人」を指す。家事や通学を主としながら農繁期に手伝う人も含まれる。

③基幹的農業従事者（現在の主要指標）：農業就業人口の中で、さらに「ふだん仕事として主に自営農業に従事している人」を指す。家事や通学の合間に手伝う人を除いた、実質的な農業の担い手。